■平成 27 年度発表論文一覧

齋藤　素子『糸魚川市の「住みにくさ」に関係する思考及び習慣についての研究』

山口　久男『根知谷山寺集落における里山の自然・文化・伝統の活用に関する研究』

小林　早文『糸魚川ジオパークにおける公共施設のジオラマ活用手法と可能性に関する研究』

瀬下　忠彦『糸魚川市内における独身者の出会いの機会と包摂に関する考察』

内山　伸一『糸魚川姫川地域における災害と字名の関連に関する研究』

樋口　すみ子『糸魚川長者ケ原集落の暮らしを case study とした現代社会との暮らし比較研究』

平野　悟『親不知を歩くことの研究』

■平成 27 年度発表論文概要

糸魚川市の「住みにくさ」に関係する思考及び習慣についての研究

斎藤 泰子（*Yasuko Saito*）

本研究は、糸魚川の「住みにくさ」に関心を持ち、糸魚川市内在住者、および糸魚川市を離れた者（糸魚川市外在住者）の、経済的側面以外の思考や生活習慣を把握し、比較することを目的にしたものである。文献調査、質問紙調査を行った結果、以下のようなことがわかった。糸魚川市内在住者、糸魚川市外在住者共に、その多くが住みにくさを感じていたが、その原因は、「海」や「雪」などの自然観光資源ではなく、「好きなことを言いにくい、しにくい」に代表される閉鎖的な思考・習慣（血脈の文化）であると確認できた。また、糸魚川市内在住者の方がより住みにくさを感じていること、糸魚川市外在住者が市を離れた理由は、以上の思考・習慣に加え、仕事や進学に関する欲求が充足されていないことにあるということが明らかになった。

根知谷山寺集落における里山の自然・文化・伝統の活用に関する研究

山口久男（*Hisao-Yamaguchi*）

新潟県の糸魚川駅より 20 分ほどで、市内南西部にある根知谷につく。ここには日本の原風景があり、Fossa Magna 添いに姫川の支流である根知川が流れ、春には河原に残雪が残り、雪解け水が増え、水が澄み、田植えが始まり、田んぼは緑に変わる。夏は根知谷より見上げる雨飾山・駒ヶ岳の雄大な姿が見られ、戸倉山からの日本海の大パノラマが見られ、夜はホタルが見られる。秋は日吉神社での国の重要無形文化財に指定されている根知・山寺の延年芸能『おててこ舞』【本文では以下『おててこ舞』と呼ぶ】が集落の方々によって受け継がれている。冬は小正月の神行事「さいの神」が行われ、炎にたらされる雪の白さ、晴れた日の朝日に照らされる、木枝についた雪の輝き、夜空に広がる煌く星の数かずなど、四季折々の contrast が見られる。近くにはシーサイドスキー場があり、オープン時には民宿も多数あった。これらの素晴らしい自然資源と人文資源について近年では 2009 年に糸魚川市全体が世界ジオパークに認定されつつも、近年の高齢化のため民宿も減少し、集落の人口も減少傾向にある。　　糸魚川市内にはそれぞれの谷ごとの里山に美しい景観や伝統文化があり、本研究では根知谷の山寺集落をベースに、自然と人々の営みを次世代に残したいと願い、地域の活性化について考察する。

糸魚川ジオパークにおける公共施設のジオラマ活用手法と可能性に関する研究

小林早文（*Hayafumi-Kobayashi*）

新潟県糸魚川市は UNESCO・Global・GeoPark として 2015 年に UNESCO の正式プログ

ラムに認定された。本地域は、地質や地形を形成する大地の公園として未知の観光資源を持っており、これからの発展が期待される。又、その資源は大変魅力的なものであり、特異な大地は独自の生態系を育み、古くからの文化も形成している。しかし、これらの環境資源や観光ポテンシャルが起動して文化交流都市となる為には、より多くの人々に糸魚川の魅力を知ってもらう必要があり、広報活動も大切な分野と考えている。本研究はこうした分野の一部分に貢献する為に、糸魚川新幹線駅校内の公共施設にあるジオラマに走る鉄道模型と鉄道シュミレーションゲームのテクノロジーやシステムを参考に、レクレーション感覚で土地の魅力を学べるスタイルの提案をすべく、その客観性について研究を行い、地域貢献の一環を形成できることを望んだ。

糸魚川市内における独身者の出会いの機会と包摂に関する考察

瀬下忠彦（*Tadahiko-Seshimo*）

新潟県糸魚川市は風光明媚な土地柄であり、2009 年にはわが国で初めての世界ジオパークに認定され他、2015 年には UNESCO の正式プログラムへと発展した。これは大変喜ばしい事であり、ぜひとも継続的な環境や文化の都市として発展してゆきたいと願っているが、人口・経済・文化の安定と発展と継続という課題であり、当然各地方都市と同じに地域の高齢化や地区の過疎化という問題と向き合いながら超えてゆかなくてはいけないハードルと考えている。本研究におけるテーマはこのハードル部分であり、そのハードルとは「若者の晩婚化の問題」である。又、平成以降、我が国の若者の晩婚化が進むことも含め「人口減少などの社会変化だけではないなにかがあるのではないか？」とした疑問を抱いていた。この関連性について、各地方都市や市町村ごとにその傾向と対策を考査する必要性を強く感じている。又、上記の問題に対する側面としては、若者の社会変化に対応しきれない地域構造的なものも存在体いる可能性も考査しなくてはいけない部分と考え著者自身も糸魚川に暮らす一人の若者として地域に寄与貢献できればと願って本文を作成した。

糸魚川姫川地域における災害と字名の関連に関する研究』

内山伸一（*Shinichi-Uchiyama*）

本研究は新潟県糸魚川市にある姫川の自然と災害の歴史を辿り、災害時の被害軽減に寄与することが期待されることを願い研究を進めた。糸魚川の面積は 746.24 ㎢、長野県北安曇郡白馬村・小谷村に隣接する。姫川は、一級河川で水源地を白馬村親海湿原で、延長 60km、新潟県糸魚川市を流れ日本海に注ぐ。糸魚川市は山と海に恵まれ、中部山岳国立公園・上信越高原国立公園を望む自然に恵まれた市で、北アプス・頚城山塊を源に、河川は川でなく滝である。脆弱な地質に、融雪・梅雨時期に河川の氾濫に大洪水を招く。1962 年、区画整理・住居表示の導入により小字か消滅され市の金庫に閉じ込められた。字名は文化財である。こ

こに「字」に秘められた謎を解析することにより、防災に役立てたい。

糸魚川長者ヶ原集落の暮らしを case study とした現代社会との暮らし比較研究

樋口すみ子（*Sumiko－Higuchi*）

古代、私たちの先祖縄文人、彼らはこの糸魚川地方において、世界で最初の翡翠による宝石文化の礎を築いてくれた。これほど古い時代（BC5000 年）に翡翠による宝石文化が起こった事例は世界にもなく、我が国においても新潟県糸魚川市が初めてのヒスイ文化発祥の地として認識されている。彼らは自然と向き合い共に暮らす事で、美的感性に優れ自然の恵みに感謝し、自然社会との共存にも大変謙虚な文化形成の基で暮らしていたと言われている。特に糸魚川地域は美しい石の産地であり、知識と技術を持った人々が住み着き文化が栄えていた。この翡翠文化と自然環境については当時、他の文化圏に住む人々にとって憧れの土地であったと考えられる。この、太古の都市文化や風土に関して、現代の糸魚川に暮らす著者は 2009 年に大地の遺産として世界ジオパークに認定されたことを機に、そのルーツとなる糸魚川の古代社会に対して time slip する形で当時の人々の生活に少しだけ触れてみたいと考え、ペンをとった。本研究は主に縄文文化中期（BC5000～3000 年）の「衣」「食」「住」に視点を定め土地にある資料・地元郷土史家・学芸員らの聞き取り調査等に基づき、一定の調査結果から現代の糸魚川における社会との比較考察を行った。

親不知を歩くことの研究

平野　悟（*Satoru-Hirano*）

新潟県に位置する”親不知”は糸魚川ユネスコ世界ジオパークにおける 24 のジオサイトの中で、最も広く世間の人に認知されている。本研究はこの”親不知”を歩くことの歴史について、また、古くから交通の難所であったこの地を移動する手段の変化について調査、研究を行った。その結果、海岸線沿いの急傾斜地に道路を安全に通すために大変な工事が伴っていることがわかった。この工事と海岸線の侵食により海の道は消滅し、山の道も便利な交通手段に取って代わられていた。利便性を求めた結果、わざわざ歩いて難所を通る意味が失われていた。一方で、近年は歩くことが見直され、歩くための道整備についても積極的に行われるようになってきている。糸魚川の塩の道で行われた歩く道の整備について調査を行い、親不知への展開を検討した。